

## 看護と介護の共働のために

尾 台 安 子  
Yasuko ODAI

### 1. はじめに

介護福祉士の教育に関わるようになって、自分自身の中に明確にしておきたいことがある。それは「看護と介護」の関係である。私は広い意味での看護に介護は包含されるものであると考える。看護という言葉もその受けとめ方は人さまざまであり、一般的には看護婦の行っている仕事、医療的仕事としてとらえられることが多い。日本における看護の歴史をみたときに、それはいたしかたのない部分でもある。しかし、本来の看護の意味するところは単に医療的サイドの看護婦の仕事を指すものではない。ナイチンゲール研究会の多くの方々が看護の本質は、ナイチンゲール著作集の「看護覚え書き」にあるとしている。私も同感である。看護職が看護の原点をおさなりにしてきた反省も込めて、ナイチンゲールの「看護覚え書き」を紹介しながら看護も介護も同じ基盤に立っているものであることを明確にしていきたい。

「社会福祉士及び介護福祉士法」が1987年に制定され10年を経過してきた。急速な高齢社会の到来に伴って、寝たきり老人等介護を要する高齢者の急激な増大、さらには家族形態の変化により家庭の介護機能は低下し、介護の問題は社会的な課題となっている。その中で介護福祉士は福祉の専門家として在宅福祉、施設福祉をつうじて中心的役割を果たすことが期待されているものである。しかし、現場においては医療職と介護職とのギクシャクした関係があることを耳にする。現に学生たちからも「あそこの老健は看護婦の下で動かなければならないから嫌だ」「介護の仕事は看護とは違う」などと、反発する声が聞かれる。看護も介護も同じ基盤に立つものであることを教えなくてはならないと感じている。そして、共に同じく人間としての生活を支えていく職種であることを自覚して共働の立場をとっていくことが必要である。このことを土台にして看護と介護の関係をとらえていくこととする。

### 2. 「看護覚え書き」の中にみる看護の本質

看護婦の元祖としてナイチンゲールの名前を知らない人はいないだろう。しかし、ナイチンゲール思想の偉大さについては、日本の看護界においてもその一部として受け入れられているにすぎない。ナイチンゲール生誕より百七十数年を経ている今日、あらためて「看護とは何か」を問うときに「看護覚え書き」をひもとかがざるをえない。そこには看護の視点が明確にされている。

日本の看護の歴史は、我が国の医療の発展史に組み込まれてきた。看護教育は医学の視点にて教育され、多くの医師の下で働き、医師の指示通り動く補助者として位置づけられてきた。その中では看護の独自性は発展しようがなかった。病院という医療体制のなかでの看護は当然のこととして医療優先で、目ざましい医学の進歩に後れを取らないように必死で医学の勉強をやってきたような気がする。しかし、ようやく看護としてどう関わるかという看護の独自性に目が開かれてきた。ここ数年来の看護学会の流れをみても対象者の生活に焦点が当てられるようになってきた。このことは喜ばしいことであるが、ナイチンゲールは百数十年前に看護とは何かということを「看護覚え書き」に明確に記しているのである。これはまさに驚くべきことであり、学ぶべきことである。その中で、

「看護がなすべきこと、それは自然がはたらきかけるに最も良い状態に患者をしておくことである」と、いっている。<sup>1)</sup>

看護は、自然の回復過程が順調にすすむようにその働きかけを助けることである。単に薬を飲ませたり、医療的処置をしたり、診療の介助をすることではなく、その人の生活のあり方をみつめて、人的な環境をも含めてその人を取り巻く環境が最良の状態にあるように整えることであるとしている。<sup>1)</sup>

「看護覚え書き」の1章から13章の目次をあげてみる。

- 1章 換気と暖房
- 2章 住居の健康
- 3章 小管理
- 4章 物音
- 5章 変化
- 6章 食事
- 7章 食物とは
- 8章 ベッドと寝具類
- 9章 陽光
- 10章 部屋と壁の清潔
- 11章 からだの清潔
- 12章 おっせかいな励ましと忠告
- 13章 病人の観察

この目次をみただけでも生活をとらえていることが理解できる。ナイチンゲールは、この中で「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを、病人にとって具合がよいように調節し、食べ物を適切に選んで提供する、こういったことの全てを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えることを意味すべきである。」と、述べている。<sup>1)</sup>

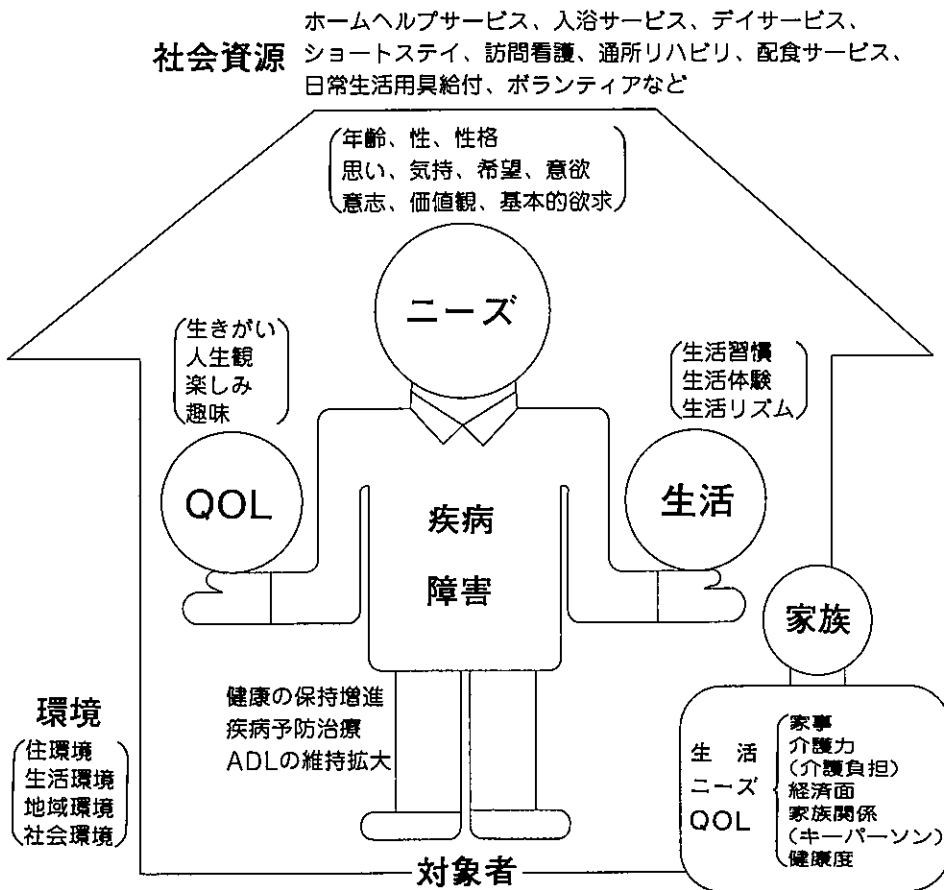
環境を整えることも、清潔さを保つことも、食べ物を選び提供するという食事に関するこ

とも、これら生活の全てに関することを、患者のもつ生命力の消耗を最小限にしていくよう整えることが看護である。看護は、生活の全てを整えて、対象者のもつ回復力に力を貸すことである。まさにこのことは、看護の原点である。

看護とは人間が営む生活そのものに焦点をあてて、その生活がその人の生命力を消耗させないように整えていく援助活動であり、人間のもつ自然治癒力を引き出していくものであり、生活そのものを支えていくものである。

看護の定義に沿ってケアということを考えてみるときに、人間という対象者をどう捉えていくかということが問題になる。対象者をとらえていくための基本図を示してみた。

図1. 対象者をとらえていくための基本図



生活とは：生理的生活・人間関係・社会生活・情緒・文化的生活

QOLとは：人間が人間として生きる喜びをもちその人らしい生活をするためのもので生活状況、身体状況、心理状況、人間関係の4つの構成要素からなる。

ニーズとは：人間のもつ基本的な欲求にもとづいた、その人の思い、意志、希望、気持、個性。

人間は生きている状態があり、生きてゆく状態がある。生きている状態は生命の維持であり、疾病の予防、健康の保持増進である。生きてゆく状態は生活そのものである。生活は一人一人のその時の思いや考えによって営まれており、生活は千差万別である。生活はその人の育てられてきた環境や身についた習慣、知識、経験などにより営まれていく。また、生活はその時々思いや心の動きを伴うものである。ケアするということは、「生命」と「生活」と「心」に働きかけるものである。働きかけの視点は、人間が営む生活に焦点をあてて、その人の生活がその人の生命力を消耗させないように整えていくことである。一人の人間の生活を整えてその人のもつ回復力に力をかすということは、以下にあげることを十分にアセスメントしながら関わる必要がある。そのことが専門職としての看護や介護のケアになる。

- ①対象者のニーズは何か
- ②対象者のもっている疾病や障害により生活上に起きてくる問題点は何か
- ③自立を阻害するものは何か
- ④対象者の生活はどのように営まれているか
- ⑤家族のニーズは何か
- ⑥家族の介護力はどうか
- ⑦家族の生活はどのように営まれているか
- ⑧対象者と家族関係はどうか
- ⑨経済力はどうか
- ⑩利用できる社会資源は何があるか、

(図1 対象者をとらえるための基本図より)

### 3. ケアとは何か

ケアという言葉が現在医療界や福祉界はもとより社会的にも頻繁に使われている。医療界においては「キュア」という言葉の対比語として「ケア」という言葉が使われていた。このケアという言葉は主に看護の日常活援助活動を意味するものであった。人間が生きていくための日常生活全般にわたる援助行為を指していた。

しかし、「ケア」という言葉は、今や日常生活の中でかなり一般的に使われる単語である。誰でもが気楽に使っている単語であり、また誰でも気楽に行為化しているのである。「ケア」はある意味で家事労働と似通っている。家庭のなかで母親が果たしているような役割の中でケアと呼べるものが多くある。このように、「ケア」という言葉のもつ意味は拡大し、曖昧に色々な分野で使われるようになってきた。たとえば、看護界で「ケア」と言ったときには、看護的かわりをもった援助行為をさすことになる。福祉界の「ケア」とは、社会福祉活動

をさし、介護そのものを意味するものとなる。そこで、我々が何気なく使っているケアという言葉の意味を考えてみる必要がある。

ケアという言葉は、医療と福祉を統合しようとする我が国の動向のなかで使われだした言葉でもある。現在では「在宅ケア」「ターミナルケア」「ケアプラン」「ケアマネージメント」「スキンケア」「口腔ケア」「ベッドサイドケア」などと、ケアという言葉は様々に使われている。ケアとは看護と介護の中間的意味合いをもち、また両者の本質を表す言葉でもある。ケアの本質を探っていくことの意味がここにある。その原点をやはりナイチンールの「看護覚え書き」に、見い出すことができる。金井は「看護覚え書き」の中の“care”という単語を拾いだしている。

表1<sup>3)</sup>。「看護覚え書き」に見るcareという単語とその意味

・ <u>care</u> in administration of diet.	— 世話
・ Will any <u>care</u> prevent such a patient…?	— 世話
・ with proper <u>care</u> …	— 気くばり, 配慮
・ with the greatest <u>care</u> …	— 細心の注意
・ All these things require common sense and <u>care</u> .	— 常識と <u>気づかい</u> とを必要とする
・ require more <u>care</u> …	— 注意
・ take greater <u>care</u> of themselves…	— 大切
・ be <u>cared</u> for	— 世話をする
・ the most cruel absence of <u>care</u>	— 最も残酷な <u>配慮</u> の欠如
・ hung with their <u>cares</u>	— <u>心配事</u> が掲げられている
・ by <u>care</u>	— <u>配慮</u> による
・ want of <u>care</u>	— <u>配慮</u> の欠落
・ take <u>care</u>	— 注意する
・ utmost <u>care</u>	— 細心の <u>注意</u>
・ very nice <u>care</u>	— 細心の <u>注意</u>
・ more <u>care</u>	— いっそうの <u>配慮</u>
・ same <u>care</u>	— 同様の <u>世話</u>
・ take <u>care</u>	— <u>気</u> をつける

ケアという言葉は英語からきており、本来は「世話をする」「大事にする」という意味がある。広義的には「気遣い」「配慮」という意味をもつ。ケアとは配慮したり、気遣ったり注意をはらうことである。これらのことはどんな行為にも伴うものである。素人のケアと専門職のケアとの違いは何処にあるのかということが問題になってこよう。看護や介護が専門職として関わったときには、行為の目的が明確にされ、どのような配慮、気遣いが必要か、どのような方向性を持っているのかを考えて行っているかというケアの視点が重要になってくる。専門職としてのケアは、さまざまな疾患や障害をもった対象者に対する生活支援を行うものである。その人らしい自立性と質の高い生活を支援するものである。

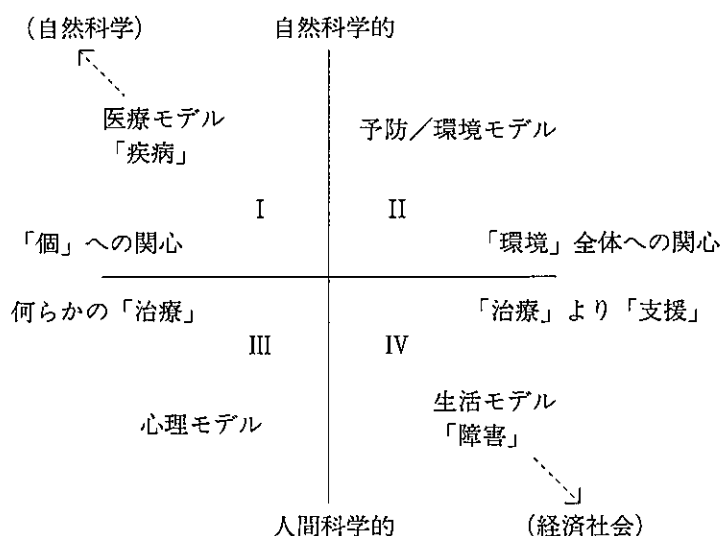
#### 4. 看護と介護

介護という言葉は、10数年前から使われだした言葉である。大正後期頃より、日本赤十字社が「家庭看護」の知識と技術の普及に努めてきた歴史があるが、この「家庭看護」がいわば介護にあたるものである。介護ということばは現在では全くの違和感もなく、以前からあった言葉の如くに使われている。急速に進行する高齢化社会に対応するために、新たに介護福祉士という専門職が設けられたが、看護も介護もともに「他者に対する援助」である。困っている人や苦しんでいる人に対してどのように援助していくかである。看護と介護のあいだに画一的な一線を引くことはできないものであり、またその区分をする必要はない。介護は看護の特殊領域の一つという要素をもち、生活の自立支援であるといわれているが、福祉サイドからは相対的に独立した領域でもある。

介護とは一般的には「日常生活の世話」としてとらえられるが、その対象は「高齢者・障害者」である。看護の対象は「生・病・老・死」にかかわる人間である。介護の対象と看護の対象は違うといわれているが、今後は益々オーバーラップしていくことになるだろう。そこで、看護と介護の相違点、共通点をあげてみてもしかたがない。共働していくためにはお互いの立場を理解していく必要がある。そして共に学び合う姿勢が大切である。

広井は「ケアの科学」の見取り図を示しており、その中で医療モデル、予防・環境モデル、心理モデル、生活モデルは、相互にクロス・オーバーし、接近し重なり合っていくものである。自然科学的な側面と人間科学的な側面をともにもち、また、固体への関心とともに環境全体への関心をも併せ持っている。「ケアの科学」はこれらの領域をはるかに遠くみわたすものである必要がある。また、ケアに関わる職種はこれらの領域全体を広く視野に収めたものである必要がある。それは高齢者であれ、誰であっても「ケア」の対象とする人間はひとつの全体だからであると、述べている。<sup>4)</sup> (図2)

図2. 「ケアの科学」の見取り図(「ケアの科学とは」p.1159.看護学雑誌No12 1997より)



今までの看護の中で軽視されてきた視点が生活モデルの領域であった。訪問看護という看護の独自性を発揮できる分野が広がり、広井の示す4つの領域が、互いにオーバーラップしていくものであるということの意味が納得できる。看護は医療的モデルからケアに関わっていく面が強いが、人間全体をとらえるときに当然のことながら、予防・環境モデル、生活モデル、心理モデルを全体的にみわたしてケアマネジメントする必要がある。

また、介護においても生活モデル領域だけにとらわれることなく、生活をしている人間の心理モデル、環境モデルにまで視点を広げる必要がある。看護も介護も本質は同じである。同一の対象者に関わるとき、方向が違っているならばおかしいことになってしまう。共に本質は「生活を支え、その人らしく生きていくことを支援する」ことであることを確認しあう必要がある。

在宅看護のなかで看取った事例を紹介したい。

#### 〔事例紹介〕

82歳、男性

病名： 胃癌

主症状： 寝たきり状態、臀部に巨大褥瘡、下肢や背部に8ヵ所の褥瘡、体位変換時に腰痛増強、低蛋白血症、貧血、MRSA(+)

生活歴： 元職業軍人であり、性格はわがままな面も見られるが、筋が通ったところがあり、非常に我慢強い。若いころはやりたい放題のことをやり、こどもたちにはかなりの迷惑をかけ絶縁状態であった。身内の人間関係の複雑さがあり

これらの新しく専門分化していった職種と看護職との関係を考えてみると、看護は個人の尊厳がそこなわれないように、看護領域から専門分化していった職種をトータル的にコーディネートする役割があると考え。各分野に通じる知識と技量を備えているのは看護職であるからこそ、その役割を担うべきである。そこに看護の専門性を見いだしたい。他職種と看護の役割の関係を図3に示してみた。対象者に関わる職種の横の連携と調整を図りつつ、オーバーラップしながら、看護独自の領域を発展させていくことが必要である。看護も、在宅医療、保健、福祉という総合的なパッケージの中に組み込まれていくとき、看護の原点に立って、その人の生活に根をおろしていく必要がある。その中で看護はコーディネートする役割を果たしながら、看護診断・看護治療という言葉に見合う力をつけていきたいものである。

今後は、「ケア」という言葉に代表されるように、看護も介護も協調し、共にその人らしい自立性と質の高い生活の支援を行えるように共働、連携していく必要がある。介護福祉教育は今後はより専門性を求めつつ、福祉の場に医療を取り込み、「生活」に視点をのこした学問体系を整えていく必要がでてくると思われる。介護福祉士という専門職として一本立ちしていくためには福祉的視点を明確にしなければならない。そして、福祉的視点をもったケアが実践できるということではないだろうか。私自身、この福祉的視点を模索していきたい。その中で、看護にはない介護福祉の専門性を説いていけるようになりたい。そして、看護職も介護職もともにより良いケアができるように学び合っていきたいと思う。

#### 引用・参考文献

- 1) ナイチンゲール：湯楨ます、薄井担子他訳、「看護覚え書き」P211、現代社、1993
- 2) 同上、P2
- 3) 金井一薫：ケアの原形論、序説、P16、総合看護、4号、1994) 広井良典：「ケアの科学とは」、P1159、看護学雑誌、NO12、1997
- 5) 金井一薫：ナイチンゲール看護論・入門、現代社、1994
- 6) 長岡敏子：老人保健施設における関連専門職との連携と方法、介護福祉、NO21、1996
- 7) 京極高宣：「社会福祉士及び介護福祉士法」10年の成果と課題、月刊福祉、NO6、1997
- 8) 広井良典：ケアって何だろう、看護学雑誌、NO1-12、1997
- 9) 金井一薫：看護と福祉の接点とその重なり、総合看護、NO1、1992
- 10) ナイチンゲール看護研究所：介護と看護の共通点と相違点について、総合看護、1993
- 11) 沢田信子：関係職種連携の必要性、介護福祉、NO21、1996
- 12) 早川和生：看護職独自の活動とは何か、看護、NO10、1995
- 13) 工藤禎子：介護と看護の共働を視野に入れた教育を、看護、NO10、1996
- 14) 松井幸子：介護の場でこそ看護の基本が発揮される、看護、NO10、1996

- 15) 木下幸代：ケア/ケアリングの意味するもの、看護学雑誌、NO4、1994
- 16) 太田貞司：看護職と介護職の役割の変化、おはよう21、4号、1996
- 17) 宮崎和加子・龍良子：訪問看護を始めるナースへ、医学書院、1996
- 18) 西村洋子：介護概論、誠信書房、1996

